～すてきな人・モノ・アートの冊子～

ふじみ野 ART88

アート発見発信プロジェクト

バルーンアート / 渡部由以子

Vol.8

2022.12.18

現代美術家

大隅敏男

おおすみ としお

アートな日本語は世界を翔ける

作品名「“瞬発力”走る！」160×120cm

●閑静な住宅地にある著名な建築家による、モダンなギャラリー兼アトリエ。そのオーナーは、現在精力的に創作を続ける、世界的な現代美術家です。

青年期にはビートルズやピカソに心酔し、ミュージシャンかアドマンになるか悩んだ末に、美術大学に進学。その後、大手広告代理店に入社。多忙な毎日の中、自らの作品制作も続け、広告及びアート分野で国内外の数多くの賞を受賞しました。

2000年になる頃より墨で文字を描く、アート作品を発表。人や物の形から取った文字は世界共通して分かり易く、漢字としてではなく形から伝わり易い。作品は、文字が元来持つ力強さや精神性を表現しています。描かれた日本語が絵として語りかけて来るようです。偶然的な筆のしずくや、滲みも表現として取り入れます。ダイナミックな墨の表現は、水墨画のようでもあります。

現代アートは、無造作にも見える表現ですが、それらは世の中の出来事や、身近な題材から着想を得ます。例えば「人」シリーズは東日本大震災の際、人との繋がりの大切さを作品に込めました。

2020年東京オリンピックの際には、アスリートを題材にした連作を発表。泳ぐ、走る、跳躍する‥それらを人という文字を使い、スポーツ選手の躍動感を思い切り表現しました。2016年バルセロナオリンピック後から2020年東京オリンピックまでの構想をねり、4年越しに制作し、パリそして東京で発表してきた大作です。

このアトリエから多彩な作品が生まれる

作品名「生命力“繁る”」72.8×103cm

作品名「歌う！」72.7×60.6cm

新型コロナウイルス感染症の流行以降、これまでより色を使う作品が多くなりました。色は希望を表します。混沌とした閉塞感のある世界で、なにげない日常の貴さを表現する事により希望を持ちたい、というメッセージです。

アトリエには、膨大な発想メモや実験的な作品が並んでいます。画材に土を使用したり、トイレットペーパーの軸を人形に見立て、縄文時代の石器と合体させたり‥。ある年は年賀状としてLPレコードを剥き出しのまま送り、郵送の間に傷つくレコードで環境汚染の地球を表現。ストイックなものからユーモラスな作品まで、自由なアイデアは氏の遊び心で溢れています。

これまで世界を舞台に活躍されてきましが、今後は国内外で活動して行く予定だそうです。2021年には日本では初の個展を開催。これからも新たな表現への挑戦は尽きません。

大隅敏男
メール：osumiart@gmail.com
HP：https://osumiart.jp/

HP

文／染川広行

はじける笑顔を生み出すワンダーランド

バルーンアーティスト

渡部 由以子

わたなべ ゆいこ

『風船』と聞いて、幼い頃ぎゅっと握った紐の先に風船がひとつ揺れていて嬉しかったことを思い出す方が多いのではないでしょうか。

しかし、バルーンアーティスト渡部由以子さんの創りだす作品は、その想像を遙かに超えています。コスチュームやキャラクター、バスケット選手は筋肉まで表現されていて、見た人を驚かせると同時に、楽しく弾むような気持ちで満たします。

バルーンアートを始めたきっかけは、お子さんが遊園地で貰った、風船で作られた剣をすごく喜んだ様子を見て、「人をこんなに喜ばせることができるものを私も作りたい」と強く思ったからでした。子供の頃から色にとてもこだわりがあり、物を作ることが大好きだった由以子さんが、大学進学で選んだのは、表現学部でした。

バルーンのもろさや色数の少なさ、形が曲線になるという数々の制約に、かえって創作意欲が高まるそうで、欲しい色のために風船を2枚重ねたり、バルーンにボンドを注入して馴染ませ、内側に膜を作って耐久性をアップさせます。コスチューム制作ではアルミのバルーンを膨らませずカットして使い、デザイン性の高い袖の表現方法を編み出しました。

バスケットボールチームの卒団式

コンテストに出場するのは、自身のコンセプト把握能力が計れ、勉強になることが多くあるからと語り、他のクリエイターを心からリスペクトしています。自身の感性を素直な探究心がさらに伸ばしている彼女が、次々と大賞を受賞する理由が分かるような気がしました。

イベント会場の出張装飾やファンが推しのアーティストに送るバルーンスタンドの依頼が増えてきている中、異素材を取り込んだ新しい表現にも挑戦したいと語る渡部由以子さんは、自身をどんどんバージョンアップさせ、自在なアイデアを形にし、独自のワンダーランドを見事に表現されています。

HP　Instagram

Balloonshop Colorful Suite
HP：https://colorful-suite.com
Instagram：https://www.instagram.com/yuiko.watanabe/
TEL：080-3244-1081（渡部由以子）
メール：yuikowatanabe@yahoo.co.jp

文／井上芳枝

すべてのものに宿る「美」を描き出す

画家　臼村さおり（うすむら）

作品名「つぶつぶ猫・銀」
横51.5cm × 縦72.8cm

作品名「祈り」
横59.4cm×縦84.1cm

無数の円が作り出す幻想的な世界。こちらの絵画を作成したのは、画家の臼村さおりさんです。高校卒業後に地球一周の旅に出たり、オセアニア宗教美術を研究したり、持ち前の行動力で様々な経験を積まれてきました。現在も、埼玉県展入選、二科展入選、現代童画展入選・受賞をされるとともに、カフェ等での定期的な個展開催など、精力的に活動されています。

インタビューの中で、とても印象的な考え方がありました。それは、「美は全てのものに宿る」というものです。「『老い』や『死』など、一見美とは正反対に思える事象も、生命の営みの中では美しいと言えるのかもしれない」と語ります。そんな臼村さんのフィルターを通すと、世界からどんな美が溢れ出すのか。

彼女の絵で特徴的なのは、やはり画面いっぱいに広がる円「つぶつぶ」ではないでしょうか。後期印象派の巨匠スーラやシニャックの細かな点描にも似て非なる独創的な世界観が魅力です。印象派の画家は小さな点で光を表しました。一方「つぶつぶ」は、仏様の光輪の輝きにも、一瞬のうちに消えていく水の泡にも見えます。永遠性と儚さ、どちらも感じられるこの表現は、一人ひとりの人間が人生の幕を閉じた後も、連綿と続いていく人類の長い歴史を表しているようにも思えます。

また、「つぶつぶ」のデザイン性の高さにも注目してほしいと思います。大小様々なサイズの円が生み出すリズムは、まるで着物の意匠や文様のようです。華やかさの中に落ち着いた雰囲気が漂います。

「これからも目の前のご縁を大切にしていきたい」と話す臼村さん。彼女の絵を見ると、もっと自分自身の美しさに気がつけるような、もっと世界が美しく感じられるような、そんな気がします。私たちが臼村さんの絵に出会ったのも何かのご縁。これからどんな素敵な作品が描き出されるのか、目が離せません。

臼村さおり
HP：https://art.saori.cc
ブログ：https://blog.goo.ne.jp/tantansaori
Instagram：https://www.instagram.com/usumura_saori/
Facebook：https://www.facebook.com/usumurasaori

HP　ブログ

文 / 三木萌依乃

人を大切にする

劇団銅鑼（どら）　佐藤文雄（さとうふみお）

2004年「センポ・スギハァラ」ニューヨーク公演

やさしさがにじみ出ている人。初めてお会いするのに、なつかしい感じがしました。丁寧にお話してくださり、まわりにいる「人」をとても大切にされていることを感じました。

中学まで青森県の弘前で過ごしたのち、船乗りになるために北海道小樽の学校へ。訓練の日々で文化的なものはなく、友人とガリ版で雑誌をつくろうと、小樽にゆかりのある伊藤整や小林多喜二の研究をしたり、詩を書いたりしました。在学中に小林多喜二原作である「蟹工船」の芝居を観ることが叶い、初めて観る舞台から発生するエネルギーに感動しました。

船乗りになった後、このままでいいのかという葛藤が生まれたときに思い出したのは、舞台のエネルギー。刺激をもらい、支えられ、力をもらったこと。「蟹工船」を上演した劇団付属演劇研究所を受けるために東京に出ることを決め、研究所を経て1975年に劇団銅鑼（どら）に入団、以後ずっと銅鑼に所属、2021年までは劇団の代表でした。杉原千畝（ちうね）（ユダヤ難民6千人の命を救った外交官）役で東欧、米国、韓国などの公演を経験したとき、演劇への人々の意識の違いを肌で感じ、劇の力を社会に生かすために、生きづらさを抱えている若者たちを対象に演劇ワークショップなどさまざまな活動をしています。公演した各国では演劇は人間形成に必要という認識があり、教育の現場でも大いに組み込まれているのです。

「人前で話せなかった人がセリフを言えるようになった瞬間。やっていて良かったって思えるんだよね。芝居をしているとそんな瞬間が必ずある」

他の人の変化に心底感動できる佐藤さんに会えて本当に良かったと飛び上がりたい気持ちになりました。

芝居をするのは失敗の連続。失敗を出し合って、出し合って、失敗してもいい場所づくりをする。丁寧に、丁寧に。自分と役との違いや共通点を考え、想像する。何のためにやるのか、伝えたい種子は何かを皆で共有する。演劇には、人生を変えたり、新しい自分を発見できたり、人間もいいものだと思えたりする力がある。

「やってきて良かった」とおっしゃる佐藤さんは輝いています。

ポーランドの巨匠アンジェ・ワイダ映画監督と
（2001年9月1日ワルシャワにて）

劇団銅鑼
TEL：03-3937-1101（受付時間：平日10時～18時）
HP：http://www.gekidandora.com/

HP

文 / 寺内みか

美意識と食文化

クッキング 杏(あん)じゅ

小林葉津子

こばやし はつこ

日々のくらしに欠かせない“食”、そのありふれたことが美しく自分を表現し、メッセージを伝える手段となることを私たちはどれだけ知っていてでしょうか？料理研究家として食文化の大切さを発信し、ふじみ野市で活躍中の「クッキング杏(あん)じゅ」主宰・小林葉津子さん。旬の地元野菜などを使いながら季節を活かし、日本人の繊細な感覚を大切にした料理を提案し教えています。

葉津子さんは幼いころ、お惣菜を手掛ける食品会社の三代目であるお父様から、食について大きな影響を受けました。学生の頃はミッションスクールに通い、その後、留学生活のなかで英語に親しんで育ったそうです。さらに京風の和の素材に囲まれていたことが、料理への興味と知識を深めました。

葉津子さんが本格的に料理の道に導かれたのは、国際交流でのボランティアがきっかけだったとのこと。好きだった料理のレシピを得意な英語で翻訳し、料理を通じた食文化の国際的なコミュニケーションに魅かれていきました。そして、講座に参加したのがきっかけとなり、クッキングスクールの講師として、海外からの旅行者に料理を教えることになったそうです。今は和食・フレンチ・イタリアンへのこだわりを大事にしながらも、地元の野菜を使用した見た目にも美しく、健康に配慮した身体に優しい料理を創作し、多くの人たちに喜ばれています。

自然の循環の中で育てられた動植物を、美味しく美しく食卓に還元するにはどうすればよいのか？食材のこしらえやテーブル周りの見せ方を工夫し、食の豊かさを手軽に演出するアイデアとは？葉津子さんの料理は、私たちがファストな時代で忘れかけている食の大切さと奥深さ、食を豊かにする方法、そして食文化を培う感覚を、優しい味と共にそっと伝えてくれています。私たちの目とお腹を幸せにしてくれる次の一皿が楽しみですね！

クッキング 杏じゅ
TEL：080-5013-0715（小林）
HP：https://anjucooking.jimdofree.com

文 / 尾澤景子

ロックンロールを愛する人生

ギターリスト / バンド「With」リーダー

小佐野 泉

おさの いずみ

「With」夢追い人

ギターとロックをこよなく愛する男、小佐野さんはバンド「With」のリーダーです。

バンド名「With」はビートルズのアルバム「With the beatles」から名付けました。結成から36年経ち、メンバーの交代もありましたが、現在も精力的に演奏活動を続けています。

バンドの前身は、銀行勤務時代の軽音サークル。今では中心メンバーである小佐野さんも、入会当初はギターが弾けず、初のステージでは弾く振りをしていたそうです。その後、ギターの腕は上達し、全国の銀行主催の数百人規模のステージで、何度も演奏を披露。ブルースロックなどの名曲で会場を沸かせました。そんな中、小佐野さんは幼少より愛して止まないビートルズが演奏したくなり、新たに「With」を結成。ライブハウスでの演奏活動を開始します。ライブハウスは、銀行員時代のステージに比べ観客との距離が近く、より臨場感があります。観客が外国人のみのステージなど様々な経験をしました。

十数年前に夢に見たCD発売の話がありました。一年掛けてレコーディングしましたが紆余曲折あり発売は夢に終わりました。それでも何とかレコーディングで録音した音源を取り戻し、今でも大切に保管しています。

小佐野さんには、楽器コレクターという一面もあります。新入社員時代、月給数ヶ月分のエレキギターを購入するのを皮切りに、大好きなジョンレノンが使用していたものと同じギターを複数所有。いずれも丁寧に保存しており、現在でも全て弾くことが出来ます。

音楽・楽器・ライブを愛し続けるスタイルは、まさにロックンローラーの鑑です。

リバプールサウンドを支えた名器達

BLANC「ライブカフェ ブラン」「With」のライブスポットです
小佐野 090-3427-6466 / 貫井（ブラン）080-5440-2872

文 / 有賀輝

～ふじみ野ART88（発見・発信）私たちが目指すもの～

世の中の価値観が、日々目まぐるしく変わってゆくこの時代。世界規模で起こった未曽有の出来事は、私たちの日常生活の中の大切なことについて、深く考える機会を与えました。それは衣食住のことだけではなく、人と人との繋がり、そして心に安らぎや潤いを与える音楽や芸術の重要性です。様々なことが困難に思える状況下でも、意識のベクトルを変えて周りを見てみると、このふじみ野市でも多くの素晴らしいアーティスト達が活躍していることに気がつきます。その活動は、私たちから不安を取り除き、勇気や希望を届けてくれるものでした。

ひとりとして同じ人がいないこの世界、そこで各人が表現するものや出来事は、ひとつとして同じものはありません。そしてこの世界は、その唯一無二である私たちが集まって出来ているものです。

私たちは、既成のアートという概念やジャンルにとらわれることなく、人の存在によって表現され繋がりを生み心を豊かにしていくものをアートと位置づけ、ふじみ野市内のアーティストを発見し、その情報を発信してゆきます。そして、皆さまが見つけたふじみ野市内のアートに関する情報を共有し、私たちも一緒に新しいものを作り出していきたいと思っています。

このアート88という冊子が架け橋となって新たなものや交流を生み、ふじみ野市全体が多様性に満ちた一つの美しいアートとして存在すること。そして、その豊かな色彩や響きが、世界中に広がってゆくことを私たちは願っています。

このプロジェクトは上記8名の公募スタッフにより企画・取材及び編集を行いました。
スタッフ / 有賀輝・井上芳枝・尾澤景子・篠島幹昌・染川広行・寺内みか・三木萌依乃（50音順）

ART88のバックナンバーは右記QRコードリンク先よりご覧頂けます。

アートフェスタふじみ野2022開催のお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け2年間オンラインで開催したアートフェスタも、3年ぶりにライブ開催します。今年度は、4会場、2日間にわたり、歌、演奏、踊り、演劇などのパフォーマンス、アート系ワークショップなど。内容も大幅にパワーアップいたしました。アートに触れ楽しむ機会として、ぜひご来場ください。

発行 / ふじみ野市文化・スポーツ振興課
編集 / ART88 プロジェクトスタッフ
356-8501 埼玉県ふじみ野市福岡1-1-1
TEL.049-262-8124
E-mail bunka@city.fujimino.saitama.jp

紙面デザイン / ライブプリント　info@liveprint.jp